

環境へのリスクが低減できると考えている。特に、繁殖個体を外に出さないということが最も要求される対策であると考えている。また、農家の方々との対話により、理解していただくことも重要である。

→ハウス内の温度が高くなりすぎると、作物のためにネットを全て開けるため、100%防げるということはない。

- ・モニタリングの方法と、それにより移出が観察された場合の対策について考えはあるのか。

→モニタリング手法については、現在研究中であるが、密源となる植物を監視することにより、野外に出ている数を定量的に推定することや営巣場所を押えるということは可能となると考えている。

- ・雑種の形成について、説明を願いたい。

→玉川大学の野教授の実験では、雑種ができたと発表があったが、再現はされていない。また、メーカーの実験では、異種間の精子が入った受精卵はふ化していない。

- ・「中立的な科学的データに基づく、リスクとベネフィットの評価が必要」と記載があるが、具体的にどういったことか。

→定着により、どの程度日本の自然に対して影響を及ぼすのか、また使用している生産者の利益をどう調整していくのかというところで、妥協できる点を探ることが重要であり、それを科学という尺度で判断するということである。

- ・マルハナバチの移動距離はどの程度か。また、蜂は巣に戻ろうとする習性があると聞いているが、マルハナバチについてはそうした習性はないのか。また、そうした習性を利用して、退治するという方法はないのか。

→飛行距離は、働きバチで半径500メートル位といわれている。また、新女王バチ、雄バチについては、巣に戻るという習性はない。

→1キロ位は、十分に採餌の範囲であると考えている。

○参考人小島啓史氏、五箇公一氏より「観賞用昆虫類（クワガタ等）について」説明

- ・オオクワガタ、ヒラタクワガタ等の移動能力は、どの程度か。また、ダニについては、全くその生態について分かっていないのか。

→クワガタムシは、飛行のために気温が18℃以上必要で、事前にたくさん歩いて筋肉を温めておかないと飛び立てないというようなところがあり、移動能力はそれほど高くない。定置性が非常に強いという傾向がある。

→ダニについては、研究例が少なく、特に昆虫に寄生するダニは未知の部分が非常に多く、種名が分からないものも多数ある。昆虫に寄生する菌やバクテリアウイルスになると、全く分かっていない。

- ・寿命は長いのか。

→雄で3～5年程度生きる。非常に強い雄が繰り返し交雑を繰り返すと、その子孫は一生のうちに100匹ぐらいに達する可能性がある。

- ・遺伝的侵食については、既にデータがあるが、それ以外の生息域の駆逐などの生態学的

な影響は見られているのか。

→都内における調査では、昼間も活動するノコギリクワガタがカラスの捕食により激減しており、代わりにヒラタクワガタが非常に増えてきている。このように、国内種同士であっても、相互に競合しているという事実があるので、更に強力な海外種が入った場合、ニッチェの争奪があり得ると考えている。

・昆虫、哺乳類などが微生物とどのような関係を持っているのか戦略的に見ていこうという動きがあれば教えてほしい。

→輸入昆虫の腹の中に入って、持ち込まれているものについて、分類学的な把握、疫学的な調査について検討している。

○参考人石橋徹氏、安田雄一郎氏より「観賞用爬虫類（カメ等）について」説明

・交尾をした後、雌は精子を体内に蓄えて、数年にわたって受精卵を産むことができるというのは、カメだけか、それとも爬虫類について一般的なことか。

→カメ以外の爬虫類についても同じような現象が知られているが、カメ類で特に多く確認されている。

・多回交尾なのか。

→基本的に年間複数回交尾し、1回の産卵に複数の雄が関している。産卵も年数回し、1回の卵の数も種類によってはかなり多い。

○参考人藤井江治氏、鷲谷いづみ氏より「緑化用草本類（外来牧草類）について」説明

・鬼怒川で実施された事業により復元した状態というのは、どの程度もつものと考えているか。また、カワラノギクを播種しているが、その種子はどこから持ってきたのか。

→上流部にシードソースがかなり残っているため、どの程度もつかは見通しが立たない。また、種子は残っているところを把握しているので、そこから採取した。

・生態系としてどのような姿、最終像があるのか。

→河原においては、まばらに植生があり、河原に固有の植物が生育し、それに依存する昆虫がいるといった、明るい環境に適応しているものが生息・生育するというものを取り戻したいと考えている。それを残さないと、何種かの種は絶滅してしまうと思う。対処療法的に行うのではなく、流域全体の環境変化に根本的なメスをいれないと取り戻せないかもしれないが、それまでの間、こうしたやり方で維持していかなければならないと思っている。

・河原にブルドーザーを入れて回復させようとしているのは、洪水がなくなったことが、原因ではないのか。

→洪水がなくなったことも河原の環境を変えている要素にはなっていると思うが、生態系になかった異質な、砂を溜め込んでしまう種類の生き物が入ってきたというのはかなり大きな影響である。

以上